

山中商会が見た東南アジア

太田小雪

1. はじめに

本稿は、1925年に古美術商・山中商会の社長であった山中定次郎が行った東南アジア地域への旅行と、その後の作品展覧・売却・寄贈を対象とし、1920年代の東南アジア美術の流通と受容を“商人のまなざし”から再考するものである。定次郎は旅行当時すでに国内・欧米市場における美術売買で名声を得ていたが、その活動の中で、東南アジア地域における遺物の蒐集と展示・流通に取り組んだ点はこれまで十分に論じられてこなかった。江戸期のタイ日本人町を初めとした人の交流・物流など、日本と東南アジアの接点、あるいはその交流にかかわる近代以降の調査研究は多岐にわたるが、古美術商による東南アジア美術の“(再)発見”や市場への導入は、近代における新たな文化的関係の構築であったといえる。本稿では、定次郎による旅行記録・展覧図録・国内外の美術館・博物館のデータベースなどをもとに、定次郎がどのような視線と目的をもって東南アジアを訪れたのか、その旅行の成果としての展覧や売却はどのように構成され、受容されたのか、そして彼の活動が日本における東南アジア美術観の形成にどのような影響を及ぼしたのかについて論じる。これらを通じて、定次郎の旅を単なる周遊や蒐集行為ではなく、その後の展示と流通を通じて東南アジア美術の価値を日本において定義しようとした実践として捉え直し、定次郎がアジアの美術をどう商い、見せ、意味づけていったのかを明らかにしたい。

山中商会および定次郎に関する研究はこれまで多角的に論じられてきた。1939年に故山中定次郎翁傳編纂會によって編まれた伝記『山中定次郎翁傳』をはじめとして、山中商会のニューヨークでの活動に焦点を当てた朽木ゆり子による著作⁽¹⁾、中国文物の国際的流通とその政治的含意を論じた富田昇の研究⁽²⁾、明治から戦前にかけての美術商活動を分析する山本真紗子⁽³⁾や、山

(1) 朽木ゆり子『ハウス・オブ・ヤマナカ—東洋の至宝を欧米に売った美術商』(新潮社、2011年)

(2) 富田昇「中国近代における文物流出と日本 山中商会展覧目録研究」(『東北学院大学論集 人間・言語・情報』(115)、1996年)や同「中国近代における文物流出と日本—文物流出の背景と諸相」(『東北学院大学論集 人間・言語・情報』(110)、1995年)

(3) 山本真紗子「山中商会の西洋美術工芸品輸入とその意義—昭和3年「美術工芸品展覧会—欧米最新考案」を中心に」(『デザイン理論』84、2024年)や同「美術商山中商会—海外進出以前の活動をめぐって—」(『Core Ethics』4(4) 2008年)

中商会の文化外交的役割に注目した小熊佐智子の論考⁽⁴⁾が挙げられる。また、日本におけるペルシア美術受容の文脈でも、ザヘラ・モハッラミプールによる研究⁽⁵⁾の中で山中商会について言及されている。これらの研究は主に、日本美術の流通と評価、あるいは中国・中東美術の国際的動向との関連で山中商会の活動を捉えており、東南アジア地域における展開に注目した研究はまだ少ない。本稿は、山中定次郎による東南アジア地域での実践と、その後の展覧・販売・寄贈活動を詳細に検討することによって、これまで等閑視されてきた日本と東南アジア美術の接点を新たに描き出すことを目指すものである。

以下では、1925年の旅行の具体的行程と定次郎のまなざしを、彼の旅行記録を通じて検討する。そのうえで、旅行成果としての展観とその構成、国内外での受容の状況を目録やデータベースから読み解き東南アジア美術の流通とその再文脈化の在り方を明らかにする。

2. 山中定次郎の東南アジア旅行

前述の伝記『山中定次郎翁傳』やその他先行研究によると、山中定次郎は1866（慶応2）年7月11日大阪の堺に生まれ、11歳で学校教育を終えると、古美術商の父の下で商売を学び、13歳で大阪の高麗橋にあった山中吉兵衛宅に丁稚奉公した。雇い主の吉兵衛に気に入られ、長女貞の婿に迎えられ、姓を安達から山中へと変えた定次郎は1894（明治27）年に渡米し、アメリカに店を開き、日本の美術工芸品を売るという計画を立てた。このような早い時期からの海外進出とその販路の拡大の一方、吉郎兵衛の逝去後の1918（大正7）年53歳で社長に就任して市場拡大にも力を入れた。1921（大正10）年には社長就任後初めての欧米視察を行い、これ以降欧州各国や中国、そして東南アジア地域へ歴訪するようになる。以下（表1）は最初の渡米である1894年から最後の海外訪問となった1931年にかけての定次郎の海外遍歴をまとめた表である。

1925年の旅行では、まず中国の龍門石窟・雲岡石窟を巡ったのち、東南アジアへと足を伸ばした。その様子の一部は、同年に出版された写真集『仏領印度支那アンコール景観』にまとめられている⁽⁶⁾。同書には巻頭に「アンコール景観解説」と題された文章があり、定次郎の旅行談をもとに、アンコール・ワットやバイヨン寺院について書かれている。この解説は、定次郎が文章を書いたのではなく、編纂時急用により渡米してしまったため、記録者である川上邦基⁽⁷⁾が定

(4) 小熊佐智子「山中商会の『美術加工品』について」（『芸術学研究』、第9号、2005年）や、同「山中商会の文化支援活動と経済活動の関わりについて」（『芸術学研究=Tsukuba Studies in Art and Design』、第10号、2006年）、同「日米開戦前後のニューヨークと東アジア美術—山中商会を例に」（『鹿島美術財団年報』、第24号、2006年）

(5) ザヘラ・モハッラミプール『「東洋」の変貌 近代日本の美術史像とペルシア』（名古屋大学出版会、2025年）

(6) 光琳社、1925年刊。同書によると定次郎が訪れたアンコールの遺跡は以下の通り。

アンコール・ワット（第一～第三廊、門、塔、浮彫、仏足石、仏像群）、バイヨン（歩廊、外壁の浮彫、四方人面塔）、パパーオン（第二廊とその装飾）、王宮テラス（壁面彫刻、不明像）、タ・ケオ（西塔）、バンテアイ・クデイ（中央奥殿、仏像）、スラ・スラン（大浴場）

山中商會が見た東南アジア

表1 山中定次郎の海外遍歴

1889 (明治32) 年	ボストンに支店を開く。主として中国新古美術、日本工芸品、雑貨、植木盆栽を販売
1890 (明治33) 年	ロンドンに支店を開く
1904 (明治37) 年	セントルイス博覧会に出品
1905 (明治38) 年	渡欧 パリに代理店を開く
1917 (大正6) 年	北京に出張所
1921 (大正10) 年6月 - 翌4月	社長就任後最初の欧米各国商状視察
1923 (大正12) 年	欧州各国周遊、蒐集
1924 (大正13) 年6月	中国、天龍山石窟
1925 (大正14) 年1月 - 翌4月	龍門石窟、雲岡石窟、インドシナ、欧米
1926 (大正15) 年10月	二度目の天龍山石窟
1927 (昭和2) 年9月 - 翌2月	欧米美術工芸界視察のため欧米訪問
1931 (昭和6) 年1月 - 5月	欧米美術工芸界視察のため欧米訪問

次郎の茶話やイギリス人の旅行記を参考にして文章をまとめたという。定次郎自身が語ったとされる旅の記述は、例えば1925年6月14日付『大阪時事』掲載の「アンコールを訪ふ」(『山中定次郎翁傳』再掲)にみられる。彼は通常のルートとは異なり、ケップに上陸後、自動車でプノンペンを経由し、トンレサップ湖を渡ってアンコール・ワットへと至ったという⁽⁸⁾。また、伝記内の略年譜によれば、実際にはアンコール遺跡だけでなく、ボロブドゥールやタイにも赴いていたとされている。実際、山中商會に残されたアルバムのうち2冊にわたって、インドネシア(バタビア博物館、チャンディムンドゥ、ボロブドゥール、プランバナナ)、タイ(バンコク、ロッブリー)、マレーシア(ペナン極楽寺)、シンガポールといった各地を訪れた記録が残されている⁽⁹⁾。ただし、そうした訪問が写真集や旅行記としてかたちになったものは、管見の限り『仏領印度支那アンコオル景觀』のみ

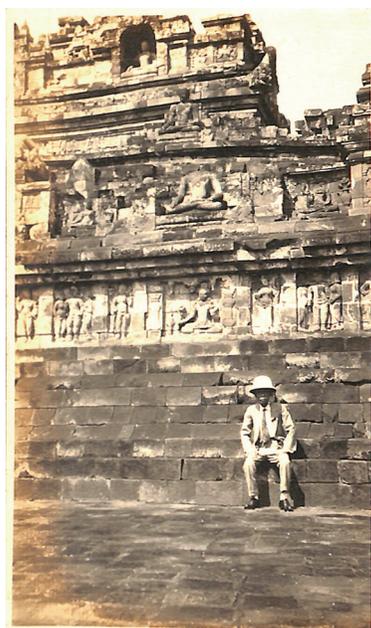


図1 山中商會所蔵アルバム「東南アジアの旅(定次郎)2」より《ボロブドゥル》

(7) 編集者か。詳細不明。著書に『日本壁の研究』(龍吟社、1943年)

(8) 「アンコールを訪ふ」(前掲『山中定次郎翁傳』所収)

(9) 株式会社山中商會所蔵アルバム『東南アジアの旅(定次郎)1』および『東南アジアの旅(定次郎)2』

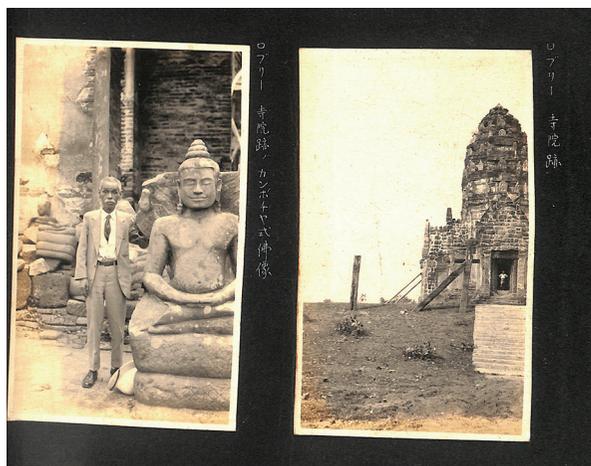


図2 山中商会所蔵アルバム「東南アジアの旅（定次郎）2」より《ロブリー寺院跡》ならびに《ロブリー寺院跡ノカンボチア式佛像》

実質的には「人跡未踏」の地ではなかったからである。

アンコール遺跡の発掘調査の歴史としては、植物学者アンリ・ムオによる1863年のアンコール遺跡群の“発見”から、実質的にはその後1866年～1868年にかけてのフランスのドゥダール・ド・ラグレ海軍大尉が組織したルイ・ドラポルトやフランシス・ガニエルによる調査隊が知られているほか、その後も相次いで調査・研究は続き、例えば1879年には現地の植民地官吏であったエティエンヌ・エモニエがその後数回にわたる探査の一回目として多数の彫像を蒐集している。そして1898年にはフランス極東学院がハノイに、サイゴンにはインドシナ考古学調査団が設立され、1907年には組織的にアンコール遺跡の調査が始まっている⁽¹²⁾。このように、定次郎がアンコール遺跡を訪問した1920年代初頭にはすでにフランスをはじめとする欧州列強による調査と修復が進められており、フランス極東学院を中心とする研究や刊行物を通じてアンコールの“再生”が植民地文化事業の象徴として語られていた⁽¹³⁾。

一方、定次郎による「アンコールを訪ふ」には、こうしたフランスの業績への直接的な言及は見られない。彼の記述はむしろ、依然として鬱蒼とした森に覆われた遺跡を前にした実見体験を中心とし、アンコール王朝の宗教施設という過ぎ去った過去の「廢墟」としての印象を伝える修辭的な表現であった。この語りは、植民地統治の理念としての“再生”への視線よりも、失われた文明の痕跡に対する感興を表すものであるといえよう⁽¹⁴⁾。

である。

「アンコールを訪ふ」では、遺跡の荒廃と静寂を強調し、「千年の榮華は長しへに眠つてゐる」「藝術の息吹は永劫に熄まぬ」といった感傷的な表現が多用されている⁽¹⁰⁾。また、定次郎の旅が「人跡未踏と呼ばれて居るアンコールをつぶさに踏査し」たものであると語っている点も注目される⁽¹¹⁾。なぜならアンコール遺跡の調査・研究は、すでに19世紀後半からフランス極東学院 (École française d'Extrême-Orient, EFEO) を中心に活発に行われており、

(10) 前掲注(8)

(11) 同上

(12) 藤原貞朗『オリエンタリストの憂鬱』(めこん、2008年)

(13) 同上。特に「第二章 フランス極東学院の創設とその政治学」を参照

また、「アンコールを訪ふ」ではアンコール遺跡の後にタイのアユタヤに赴いたことが記されている。ここでは「アンコール・ワットを見た私は山田長政によつて我國に知られてゐる暹羅のアユタヤ（日本人町）を訪れました。アユタヤは長政時代の王朝のあつた處で三百年前六百名の日本人が此の居住していたさうです。」と紹介しながら、草生した廢墟に仏像が横たわるさまを記録している。「何等も見るべきもなく」「只僅にその當時の同胞が禮拜啓して居たと思はれる佛像が芋々として繁つた草原に横はつて居る」と記された文章には、アユタヤを過去の栄光を失った都市として描く視線が顕著に表れている⁽¹⁵⁾。ここにもまた、過去の日本町への郷愁などとともに、文化の変遷を見つめる観察者としての視線が見て取れる。実際、山中商会が1932年に開催した「東西古美術展覧会」の序文において、定次郎は自身のそうした世界の過去の文化や遺物に対する考えを次のように述べている。

古今東西を論ぜず文化あるところに美術あり、其形式に於いては人文風土の異なるにつれて變化すれども、その内容に至りては一貫して人の心をうつものあり。即ちこの普遍性の存在するが故に遙かに海を隔てし諸外國に於て東洋美術が愛玩され又我が國に於て諸外國美術の尊重さるゝ所以なり。弊商會數十年來の使命となすは即ち彼我の美術交換により東洋文化を海外に高揚し翻つてはその發展に資せんと努力する處にあり。その目的の一助として古代各國美術の逸品を蒐集し世の好古諸賢の觀賞を乞はんとし、こゝに東西古美術展覧會を開催せんとす。(後略)⁽¹⁶⁾

ここに示された定次郎の古美術商としての使命感は、彼が東洋・西洋の遺物を文化の多様性と美の普遍性を証する存在として提示しようとしたことを物語るものである。したがって、1925年の東南アジア旅行と後述する翌年の展覧会にいたるまでの一連の活動は、古美術商という立場から、近代日本における東南アジア美術を受容する初期的な試みであると同時に、西洋ともつながる東洋美術史（世界美術史）を実践的に構想した一つの到達点と位置づけられるだろう。

このように、山中定次郎の東南アジア旅行におけるまなざしは、単に異国の遺跡や風景を異化的に描くものではなく、過去の文明に通底する普遍的な美を見出そうとする姿勢に基づいていた。彼の旅は、観光や美術愛好の域を超えて、蒐集と展示を通じてカンボジアやタイといった東南アジアの文化的・美術史的価値を日本で再構築しようとする実践として特徴づけられる。

(14) 藤原氏はこうした視線がのちに戦時下の日本が東南アジアに向けて抱いた、「亡国と化した南方の一国を皇軍が救出しにゆくという戦中のフィクション」に接続していくと指摘する。(前掲注(12)。特に「第八章 アンコール遺跡の考古学史と日本」参照。)

(15) 前掲注(8)

(16) 「東西古美術展覧会」(前掲『山中定次郎翁傳』所収) この展覧会には東南アジアの遺物の出品はないが、エジプト、ローマ、ギリシャから中国まで、特にアフガニスタンのハッダの仏像を組み込んだ点が強調されている。

3. 展観としての「アジア」：国内外での紹介と売立、寄贈

1925年から翌年にかけての山中定次郎の東南アジア旅行は、帰国後の1926年1月に大阪美術倶楽部で開催された「東西古匱金石展観」へと結実した。定次郎にとってこの「展観」という形式は、単なる売立や陳列ではなく、遺物を美術品として価値づけ、観者のまなざしを誘導しながら市場へと導入するための装置であった。朽木氏が指摘するように、展観という見せ方は、それまで顧客と一対一で品物を販売していた古美術商の従来形式を一新し、欧米のギャラリー展示やオークションの内覧会に倣った形式として、誰でも入場できる公開展示空間のなかにガラスケースあるいは露出で商品を陳列し販売するという新しい美術流通のかたちであった⁽¹⁷⁾。また旅行には写真技師を同行させ、現地で撮影した写真を展覧会場に掲示し、カタログを作成するなど、演出面にも工夫を凝らしていたという⁽¹⁸⁾。

こうした展観という語の選択そのものにも、定次郎の意図がうかがえる。「展観」という語を『日本国語大辞典』で引くと、近代以前から「ひろげて見ること」「展覧」「広く一般に見せること」といった意味で用いられ、江戸から明治・大正期にかけて各地で行われた書画骨董会や博覧会の記録にも頻出することがわかる⁽¹⁹⁾。ただし、「展観」と称される場合、それは通常、美術館や個

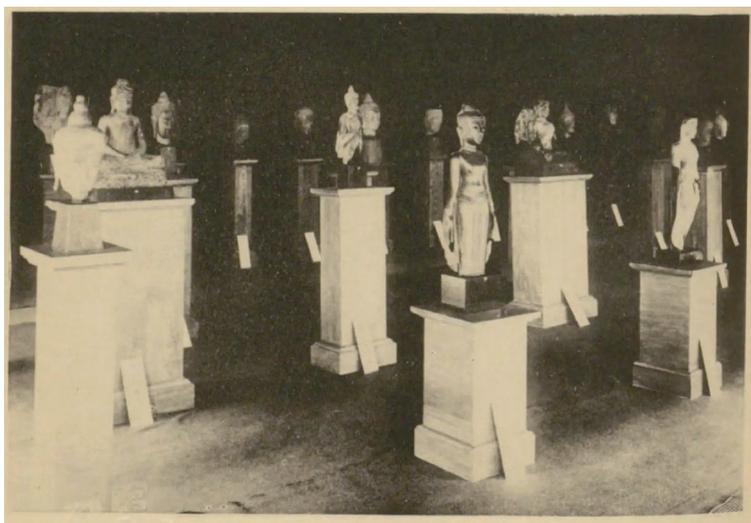


図3 『山中定次郎翁傳』より「東西古匱金石展観」の会場の様子

(17) 前掲注(1)、p.286

(18) 同上、p.322

(19) 『日本国語大辞典』(小学館、2001年)「展観」の項：〔名〕(1)ひろげて見ること。展覧。(2)広く一般に見せること。展覧。用例として、随筆『玉洲画趣』(1790年)「文人の作る所は皆余閑の戯筆なる故、多く巻帖扇面の類にて、掛幅も大幅も相好不申候。此は几上に展観し又は旅行に携」や洒落本『うかれ草紙』(1797年)「『てんくわんとはなんで御ざります』『展観とは書や画の書たのを見せるのじゃ』」などを挙げている。

人蔵の品々を「ひろげて見せる」ことを目的とした催しであり、必ずしも即売とは結びついていなかった。これに対して、売買を目的とした場では「売立」や「入札」という用語が一般的に用いられていた⁽²⁰⁾。

定次郎が行った「展観」は、この両者の要素を融合させた点に特色がある。すなわち、古美術

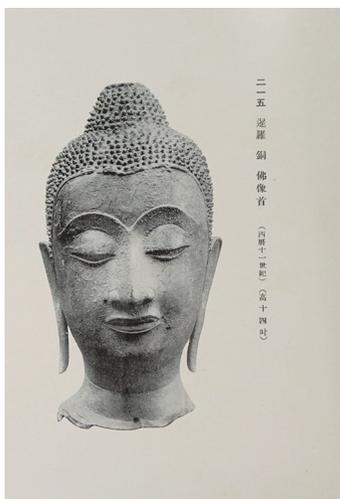


図4 『東西古匱金石展観』より
《二一五 暹羅 銅 佛像首》

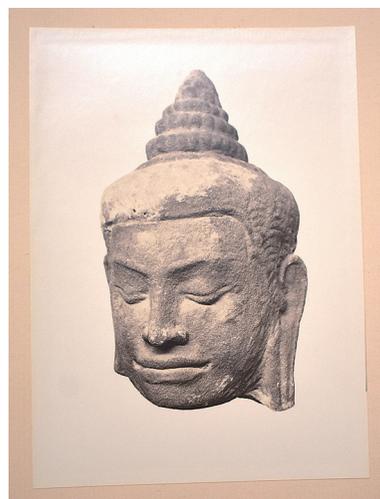


図5 『世界古美術大展覽会』より
《カンボジア仏頭》

商としての売買を前提としながらも、展覧会的な空間構成と目録を備え、観客に対して鑑賞と交流の場として提示したのである。「展観」という言葉を選んだことによって、従来の「売立」よりも学術的・教育的側面を強調し、近代日本における古美術の公開と流通のあり方に一つの転機をもたらしたといえる。「東西古匱金石展観」では、エジプト・ギリシャ・ペルシアをはじめとする西アジアからインド・ガンダーラ・東南アジア・中国に至る諸地域の遺物や仏像が選ばれており、特にガンダーラの像類は日本初公開となる希少な品を多く含んでいた⁽²¹⁾。会場の様子は多くは残されていないが、かなりの数の仏像が展観されていたことがわかる（図3）。目録を見ると、東南アジア地域ではカンボジア（柬埔寨）やシャム（暹羅）、ラオス（老撾）といった地域の仏像・神像が、「西曆九世紀ヨリ十二世紀」などと地域ごとに大まかな年代を明記してまとめられている。序文には「これまで餘り世に紹介せらるゝの機會なかりし暹羅、柬埔寨、印度の佛像は今や欧米に於て盛に鑑賞且つ研究されつゝあり」と記され、欧米での関心の高まりを背景としながら、それらの作品が「日本においても鑑賞に値する」ことを訴えている⁽²²⁾。このような語り口によって、遺物の希少性や国際的価値を強調しており、展観が単なる販売ではなく、美

(20) 明治・大正期・昭和初期にかけて、例えば国書データベースや「国立国会図書館所蔵 戦前期美術展覧会関係資料目録」（『参考書誌研究』第50号、1999年）に「展観」という語が頻出するが、いずれも収蔵品の展示を目的としており、販売要素を伴うものは少ない。これに対し、「売立」「入札」という用語は、明確に売買を目的とする会を指す。

(21) 特に日本におけるガンダーラ美術愛好の需要は山中商會が導いたと言ってもよい。序文を見ると同展には同時期に來日していたアルフレッド・フーシェの“お墨付き”をもらっていたようである。（『東西古匱金石展観』（山中商會編、1926））

(22) 「柬埔寨」、「暹羅」（同上）

術史的文脈への位置づけの場でもあったことを物語る。このあとも山中商会は「世界古美術大展覽会」（1932年）や、「東洋古美術展覧会」（1938年）などを開催し、タイやカンボジアの仏像を出品していたことが確認できる⁽²³⁾。

展観のタイトル「東西古匁金石展観」、あるいは「世界古美術大展覽会」、「東洋古美術展覧会」は、文明の東西・東洋という美術史の版図・系譜を位置づけようとする定次郎の意図を反映していた。ギリシャ・ローマ、エジプト、ペルシアといったいわゆる「西」の古代美術を並べながら、その橋渡しとしてのハッダ、ガンダーラの遺物、「東」としてのインド、中国、朝鮮、日本、そしてそこに東南アジアの作品を組み込むことで、世界美術が示されているといえよう。こうして蒐集されたカンボジアやタイの遺物は展観の空間構成と目録での語りによって世界美術史の中のアジア美術の一員として再構成され、市場価値と観者の知的関心の両方を刺激していたのである。

また、定次郎は蒐集した遺物を販売するだけでなく大学や博物館に寄贈もしている。京都大学や東京藝術大学、東京国立大学等の教育機関、博物館に中国考古遺物やガンダーラ石仏、ギリシャの遺物などを寄贈していたことが伝記内の「略年譜」に記されている。東南アジアでいえばたとえ昭和元年12月7日には奈良女子高等師範学校に「シヤムの銅仏頭部」を寄贈しており⁽²⁴⁾、こうした行為について、定次郎に近しかった濱田耕作（1881-1938）は、彼の次のような発言を伝記内の追憶録に残している。「大學の方々に何等直接お世話になることはありませんが、貴方方の御研究が自然に社會一般の趣味を廣くし、間接に自分たちの商賈にどれ丈け大きな影響を與へてゐるかは分かりません、之れに對して自分は御禮をしなければなりません。」⁽²⁵⁾すなわちこのような定次郎の態度は教育機関への寄贈を、學術・文化的貢献と市場戦略の両面で位置づけた、商人としての実践であった⁽²⁶⁾。

定次郎の寄贈・売却は国内にとどまらず、欧米にも及んでいる。1926年6月には、ロンドンで《Siamese Bronze, Chinese Stone Sculpture and Siamese Painting》と題する展観・売立が開催され、タイの金銅仏や絵画、中国の石彫などが紹介された。1926年から1931年の間に山中商会から売却されたとみられる東南アジアの仏像は、アメリカのメトロポリタン美術館、フォッグ美術館、デトロイト美術館などのコレクションにも収蔵されている。また、『山中定次郎翁傳』の「美術品の寄贈その他」には、略年譜には記載のない海外への寄贈例も確認できる。たとえば、カナダ

(23) これらは1925年に蒐集され、「東西古匁金石展観」において出品されたものの一部であろう。また、ガンダーラやハッダの仏像への注目比して関心度は低かったようで、「東西古匁金石展観」とは異なり序文や解説での言及はない。

(24) 「翁の略年譜」（前掲『山中定次郎翁傳』所収）

(25) 「諸名家追憶録（配列いろは順） 濱田青陵」（前掲『山中定次郎翁傳』所収）

(26) こうした學術的協力、研究者との交流は1924年に大阪美術倶楽部で開催した「古代美術品大展覽会」において、正木直彦・大村西崖を招聘し美術講演会を催したことなどからもうかがえる。「大阪最初の美術講演会」（前掲『山中定次郎翁傳』所収）参照

のトロント王立オンタリオ博物館や、アメリカのウォルターズ美術館には、山中商会・山中定次郎からの仏像寄贈が記録されている⁽²⁷⁾。

さらに戦時中には、アメリカにおいて山中商会の資産が「敵国財産」として接収され、戦後に再流通する事例も生じた。たとえばスミソニアン協会のフリーア美術館には、1942年にアメリカ合衆国敵国財産管理局（Alien Property Custodian）によって接収された仏像が収蔵されており、その一部は1944年にオークションにかけられた⁽²⁸⁾。

こうした東南アジア方面に関わる展観や寄贈の実態を整理すべく、展観図録、カタログ、寄贈記録、各博物館の所蔵品データベースをもとに、山中商会による国内外の販売・寄贈の概要を本文末に表にまとめた。しかしながら、現時点では当時の記録と現在の所蔵品を明確に照合できる事例は限られており、特に寄贈先や購入者が記載されていない図録も多く、全体像の把握には課題が残る。



図6 Head of Bodhisattva Avalokiteshvara, Stone, late 12th century, Thailand (Lopburi), H. 17 in. (43.2 cm), Yamanaka & Co., Kyoto, until 1926, sold to MMA

4. 選択された形式・様式、日本の東南アジア美術史観

前章までにおいては、山中定次郎が1925年に東南アジアを訪問し、その現地体験をもとに展観を通じて東南アジアへのまなごしを形作っていった過程を見た。本章では1920年代の日本において、東南アジア美術はどのように理解され、いかに価値付けられていたのかを検証する。

当時、日本の東南アジア紹介や受容のあり方の背景には、「南方」へのまなごしの変遷があった。日清・日露戦争を経て列強の一員となった日本は、1910年代から30年代にかけて東アジア・東南アジアへの文化的関心を高めていった。しかし、東南アジアはインド古代仏教美術や中国・朝鮮のように日本の文化的ルーツと結びつけられる地域に比べれば、依然として周縁的な存在であり、一般の美術鑑賞者や研究者にとっても馴染みが薄かった⁽²⁹⁾。この状況下で定次郎の行った展観は、

(27) 本文末の表を参照

(28) Parke-Bernet Galleries, *Oriental Art Part I*, 1944年、山中商会ニューヨーク／シカゴ店旧蔵

(29) 近代日本における東洋美術史と東南アジアについては拙稿、太田小雪・米本友梨江「會津八一の東南アジア仏像蒐集と『東洋美術史』講義」（『會津八一記念博物館研究紀要』、2021年、第25号）・太田小雪「東京国立博物館蔵フランス極東学院交換品クメール美術コレクションの価値・評価の検証に関する研究」（『鹿島美術研究』第42号、2025年）参照

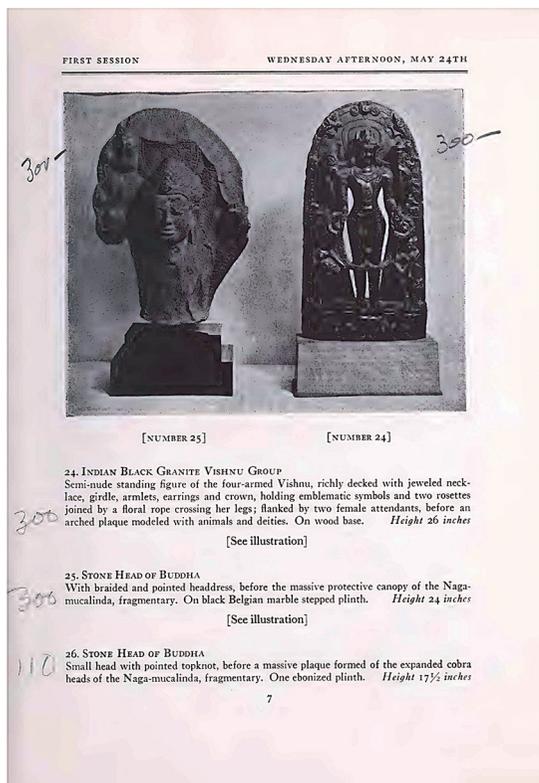


図7 *Oriental art, part I* By Parke-Bernet Galleries
1944 Yamanaka & Co. Inc., New York and Chicago Collection

欧米ですでに研究・鑑賞の対象となっている地域を強調し、日本国内の鑑賞者に対し東南アジア美術の国際的価値を先取的に提示する意図を有していた。また、展観構成においては、中国や日本と並列してカンボジアやタイの仏像を配置することで、アジア美術という広域的な枠組みが構成されていた。

図録の記述スタイルや実際の作品の選定にもこうした意図はあらわれる⁽³⁰⁾。前述の1926年6月のロンドンでの展覧会・売立の目録 *Illustrated Catalogue of an Exhibition of Siamese Bronze, Chinese Stone Sculpture and Siamese Painting* では、巻頭にタイ美術史の時代・様式区分（ドヴァーラヴァティ、スコータイ、アユタヤなど）が簡結に示され、各作品には由来や形式を記したキャプションが添えられている。他方、同年の大阪美術倶楽部「東西古陶金石展観」展観目録では、カンボジアや

シャムといった地域の概説のみが巻頭に置かれ、個々の作品解説や美術史的な様式分類・解説等は見られない。この差異は、欧米と日本における東南アジア美術史の受容の違い⁽³¹⁾を反映しており、当時の日本ではインドシナ学的知識や東南アジア方面の美術史的関心が十分に浸透していなかったため、定次郎はあえて地域概説によって導入的な理解を促したと考えられる。

(30) 以下の分析は本文末の表参照

(31) 1920年代の欧米では、東南アジア美術に関する体系的な出版物がすでに複数刊行されており、ある程度の周知が進んでいた。例えば、アルフレッド・サルモニーによる *Sculpture in Siam* は1925年に刊行され、学術的にはその後のダムロン親王の研究に劣るものの、当時ドイツで収集された資料のみを用いており、同国のアジア美術への関心、民俗学的興味、さらにタイ王室の文化振興（万国博覧会への出品、収集・発掘活動、1904年のシャム・ツサエティ設立）と連動していたと言えよう。一方、タイ国内ではダムロン親王が1926年に *Tamnan Phutthachedi Siam*（シャム仏蹟史）を刊行し、美術史・考古学の発展に大きく寄与した。続いて、ジョルジュ・セデスが1928年に *Collections archéologiques du musée national de Bangkok*（Ars Asiatica XII）を発表し、バンコク国立博物館の歴史やシャム考古学全般を概説した。掲載図版は6世紀頃から15世紀までの石彫・青銅器・陶器を網羅し、簡潔な解説と共に出所・年代が記されている。さらに1931年には、同じくセデスが *Les collections khmères du Musée Albert Sarraut à Phnom Penh*（Ars Asiatica XVI）を刊行し、プノンペンのアルバート・サロー博物館所蔵カンボジア美術コレクションを解説している。

6月のロンドン売立は、12～15世紀を中心とするタイ（アユタヤ・スコタイ・ロップリーなど）のブロンズ像に特化し、坐像・立像・半身像・仏首など小型で精緻な作例を揃えている。細密な衣文線、尖塔形のウシュニシャ（肉髻）、宝冠像など、比較的小型で移動可能な、且つ美術的価値の高い金属彫刻が選ばれ、輸送や価格面でも購買層に適した構成となっていた。対して同年1月の「東西古甸金石展観」では、9～12世紀を中心とするカンボジア（アンコール期）の石造仏像やナーガ像、光背付仏首など大型で重量感のある作品が多く、砂岩の滑らかな仕上げや量感豊かな肉付け、静謐な微笑など、地域様式の特徴が明快に示されていた。タイの石造仏首や銅造仏像も加えつつ、全体として視覚的インパクトと様式的特徴の明快さを優先した構成であり、東南アジア美術史への理解が薄かった国内観客に印象を与える意図があったと考えられる。この二つの展観・売立は、同じ旅での蒐集の結果でありながら、ロンドンでは精緻な小型ブロンズを、国内では大型石造を軸に据えることで、対象地域の素材・技法・様式の多様性を示しつつ、それぞれの市場環境に適合させていたと考えられる。さらに戦時中に接収された作品の中には、これら展観出品作と形態的に一致するものがあり、販売・寄贈対象から外れた残存品が後年に再流通したことも示唆している。

売却・寄贈された仏像の様式的傾向を見ると、『仏領印度支那アンコール景観』などにみられる語りの印象とは異なり、実際にはタイ由来の作品が多数を占めていた。特にクメール美術でも、ロップリー様式やアユタヤ期、ウートン様式など、タイ北東部の作品が多い。この偏りは定次郎自身の嗜好よりも、現地の入手可能性や遺物移動の実態に起因するだろう。カンボジアでは当時すでにフランス極東学院が遺跡保護と調査を進め、遺物管理と売却を統制していたため流通は限られていた一方、タイでは文化財保護体制が整いきっておらず、市場に出やすい状況があった⁽³²⁾。

このように、山中定次郎の蒐集・販売は、美術史的な地域様式の差異と市場・観客層に応じた選別戦略が密接に結びついており、20世紀前半の国際美術流通における展示と市場戦略の融合を端的に示す事例であった。さらに、定次郎の国内活動は寄贈や展観にとどまらず、同時代の研究者やコレクターとの交流を通じても展開されていた。とくに、タイ美術の蒐集で知られる大倉喜八郎や、工芸家・美術史研究の立場からタイに滞在していた三木榮、ポロブドゥール研究に資した三浦秀之助らとの接点は、作品の評価や分類に関する知識交換の場を形成し、定次郎の展示構成や蒐集方針にも影響を与えたと考えられる⁽³³⁾。こうした人的ネットワークは、商業的活動と学術的関心をつなぐ媒介として機能し、日本における東南アジア美術受容の基盤形成にも寄与したといえよう。

(32) EFEOの遺物考古発掘と遺物売却については藤原貞朗前掲注(12)に、タイの近代考古学・美術史学の形成については日向伸介「ダムロン親王『シャム仏蹟史』(1926)の成立と思想」(『南方文化』40、2013年)、同「近代タイにおける考古学行政の導入過程」(『アジア・アフリカ地域研究』、2019年)に詳しい。

5. おわりにかえて 山中定次郎の旅と東南アジア美術：評価と展望

1925年の山中定次郎による東南アジア旅行と、その後の展観・販売・寄贈に至る一連の活動は、東南アジア美術をあつめる／見せる／売る／研究する対象として再構築する試みであった。本稿で検討してきたように、定次郎はアンコールやアユタヤの遺跡を訪れ、そこで得た作品群を自らの審美眼と市場感覚に基づいて選別し、展覧会図録や展示を通じて“東洋美術”の一員として提示している。彼の視線は、東南アジアを“失われた過去”として郷愁的にまなざしつつ、世界美術史の中に組み込み、遺物を市場に乗せるための商品としても位置づけていた。その営為は、山中商会が欧米に支店を持ち、定次郎自身も繰り返し欧米を訪れた中で、日本にはまだ根付いていなかった東南アジア美術史評価を目の当たりにした経験が基盤となっているが、一方で欧米的な“復興”や“文明化”の語りとは異なるかたちで遺物の価値を再定義しようとした。

定次郎の東南アジア活動は、単なる古美術商の事例ではなく、世界美術史の枠組みを想定しながら、日本の立場から東南アジア美術を位置づけ直そうとする試みであった。今後は、こうした商人やコレクターの活動に加え、現地側の対抗的な視線や、遺物がどのように受容・再解釈されていったのかという視点をも取り込みながら、美術流通史のさらなる再検討が求められるだろう。それは同時に、誰が・何を・どのように美術史として語るのかを問い直す作業でもある。

【謝辞】 本稿の執筆にあたり、株式会社山中商会社長・山中譲氏より貴重な資料をご提供いただいた。末筆ながら、ここに記して深く感謝の意を表します。

【付記】 本稿は早稲田大学特定課題研究助成費（課題番号：2025C-350）ならびに2025年度-2026年度科学研究助成事業 研究活動スタート支援（課題番号：25K22960）による研究成果の一部である。

(33) 三木榮（1888-1964）は、1905年に東京美術学校漆工科に入学し、1910年に卒業。1911年にタイへ渡航する。1930年の一時帰国時には、蒐集品を展覧会で日本に紹介した。三木は自伝で、タイ渡航の目的として①シャムの古美術や北部チェンマイ地方産の漆・キンマ塗漆器の研究、②大村西崖の勧めによる「東印度半島の仏教芸術」研究を挙げている。同じく大村西崖の門下であった三浦秀之助も、インドネシア研究のため現地調査を行い、千数百枚の写真を撮影。帰国後に『閻婆仏蹟ポロブツール解説』（1925）、『瓜哇古面譜』（1923）などを刊行し、日本のインドネシア・ポロブツール研究に影響を与えた。三木と三浦はいずれも山中商会から著作を刊行（三浦秀之助『東西古織錦繡鑑』1926、三木榮『暹羅の芸術』1930）しており、大村や正木直彦を介した山中商会とのネットワーク（注26参照）を持ち、共に東南アジアに関心を向けていた。

拙稿、太田小雪「東京国立博物館蔵フランス極東学院交換品クメール美術コレクションの価値・評価の検証に関する研究」（『鹿島美術研究』年報第42号別冊、2025年）参照

山中商会が見た東南アジア

【図版出典】

図1：株式会社山中商会所蔵『東南アジアの旅（定次郎）2』

図2：同上

図3：『山中定次郎翁傳』（故山中定次郎翁傳編纂会 編、1939年、p.262）国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1258420>（参照 2025-08-15）

図4：『東西古匁金石展観』（山中商会、1926年）

図5：『世界古美術大展覽会』（山中商会、1932年）

図6：The Metropolitan Museum of Art, New York, Fletcher Fund, 1926, URL: <https://www.metmuseum.org/art/collection/search/38607>

図7：*Oriental art, part I By Parke-Bernet Galleries 1944 Yamanaka & Co. Inc.*, New York and Chicago Collection

【附 山中商会のタイ・カンボジア・ラオス仏像の売立と寄贈のリスト（国内・国外）】

凡例

国名表記：国名は原資料（展観図録、売立カタログ、寄贈記録、各美術館データベース等）の記載に依拠したため、同一地域であっても「シャム」「暹羅」「タイ」など複数の表記が混在する。

作品名：作品の名称は原資料に記載されたものを基本とし、カタログやデータベースの記述を翻訳せずにそのまま用いた。必要に応じて簡潔化したが、意図的な意識や改変は行っていない。

サイズ：寸法は原資料に基づき、インチ表示を原則とした（小数点以下も資料の表記を踏襲）。一部資料ではセンチメートル併記の場合があり、その場合も原文通りとした。

地域・年代：地域区分や年代も原資料の記載をそのまま反映しており、様式名称や時代区分（例：アユタヤ、スコータイ、ロップリー）はカタログ・データベースの表記に準じた。

No 欄：原則として、展観図録・売立カタログ等に掲載されたプレート番号やロット番号を記載した。

備考欄：手書きの購入者名（例：J. Epstein, Rutherford, J. Maltwood など）や図版掲載の有無など、カタログ・記録に付された追加情報やデータベースの URL を記載した。

① 国内寄贈・売立リスト

No.	寄贈・販売先	名称	地域・様式	年代	寸法 (inch)	材質	寄贈・売立年	出典	備考
—	奈良女子高等師範学校	仏像頭部	暹羅	—	—	銅造	1926.12.7	『山中定次郎翁傳』年譜	—
170	不明	仏坐像	東埔寨	9～12世紀	23	石	1926	「東西古匁金石展観」	—
171	不明	仏坐像	東埔寨	同上	8.5	石	1926	同上	—
172	不明	胸像	東埔寨	同上	20	石	1926	同上	—
173	不明	龍王後背半身像	東埔寨	同上	22	石	1926	同上	—
174	不明	龍王後背半身像	東埔寨	同上	19	石	1926	同上	—
175	不明	龍王後背首	東埔寨	同上	16	石	1926	同上	—
176	不明	後背付首	東埔寨	同上	13	石	1926	同上	—
177	不明	龍王後背首	東埔寨	同上	11.5	石	1926	同上	—
178	不明	龍王後背首	東埔寨	同上	10	石	1926	同上	—
179	不明	後背付首	東埔寨	同上	8	石	1926	同上	—
180	不明	仏首	東埔寨	9世紀	12	石	1926	同上	図版あり
181	不明	仏首	東埔寨	9～12世紀	20	石	1926	同上	—
182	不明	仏首	東埔寨	同上	12	石	1926	同上	—
183	不明	仏首	東埔寨	同上	8.5	石	1926	同上	—
184	不明	仏首	東埔寨	同上	8	赤石	1926	同上	—
185	不明	仏首	東埔寨	同上	6.5	石	1926	同上	—
186	不明	仏首	東埔寨	同上	5	石	1926	同上	—
187	不明	仏首	東埔寨	同上	5	石	1926	同上	—
188	不明	仏首	東埔寨	同上	7.5	石	1926	同上	—
189	不明	仏首	東埔寨	同上	16	銅造	1926	同上	—
190	不明	仏首	暹羅	9～13世紀	20.5	赤石	1926	同上	—
191	不明	仏首	暹羅	同上	13.5	石	1926	同上	—
192	不明	仏首	暹羅	同上	13.5	石	1926	同上	—
193	不明	仏首	暹羅	同上	13.5	石	1926	同上	—
194	不明	仏首	暹羅	同上	19	石	1926	同上	—
195	不明	仏首	暹羅	同上	16.5	石	1926	同上	—
196	不明	仏首	暹羅	同上	16.5	石	1926	同上	—
197	不明	仏首	暹羅	同上	16.5	石	1926	同上	—
198	不明	仏首	暹羅	同上	15	石	1926	同上	—
199	不明	仏首	暹羅	同上	16.5	石	1926	同上	—
200	不明	仏首	暹羅	同上	12	石	1926	同上	—
201	不明	仏首	暹羅	同上	15.5	石	1926	同上	—
202	不明	仏首	暹羅	同上	12.5	石	1926	同上	—

山中商会が見た東南アジア

No.	寄贈・販売先	名称	地域・様式	年代	寸法 (inch)	材質	寄贈・売立年	出典	備考
203	不明	仏首	暹羅	同上	13.5	石	1926	同上	—
204	不明	羅漢小首	暹羅	同上	2.5	石	1926	同上	—
205	不明	仏首	暹羅	同上	15.5	石	1926	同上	—
206	不明	仏立像	暹羅	同上	15	銅造	1926	同上	—
207	不明	仏立像	暹羅	同上	29	銅造	1926	同上	—
208	不明	仏首	暹羅	同上	10	銅造	1926	同上	—
209	不明	仏首	暹羅	同上	13	銅造	1926	同上	—
210	不明	仏首	暹羅	同上	9	銅造	1926	同上	—
211	不明	仏首	暹羅	同上	19.5	銅造	1926	同上	—
212	不明	仏首	暹羅	同上	12	銅造	1926	同上	—
213	不明	半身像	暹羅	同上	12.5	銅造	1926	同上	—
214	不明	半身像	暹羅	同上	19.5	銅造	1926	同上	—
215	不明	首	暹羅	11世紀	14	銅造	1926	同上	図版あり
215	不明	首	暹羅	11世紀	14	銅造	1926	「東西古甸金石展観」	図版あり
216	不明	首	暹羅	9～13世紀	14	銅造	1926	同上	—
217	不明	首	暹羅	同上	22	銅造	1926	同上	—
218	不明	首	暹羅	同上	16	銅造	1926	同上	—
219	不明	首	暹羅	同上	13.5	銅造	1926	同上	—
220	不明	首	暹羅	同上	11	銅造	1926	同上	—
221	不明	首	暹羅	同上	11	銅造	1926	同上	—
222	不明	首	暹羅	同上	13	銅造	1926	同上	—
223	不明	半身像 (小)	暹羅	同上	5	銅造	1926	同上	—
224	不明	仏半身像 (小)	暹羅	同上	7	銅造	1926	同上	—
225	不明	仏半身像 (小)	暹羅	同上	7	銅造	1926	同上	—
226	不明	仏首	暹羅	同上	8	銅造	1926	同上	—
227	不明	半身像 (卷物持)	暹羅	同上	3.5	銅造	1926	同上	—
228	不明	半身像 (小)	暹羅	同上	3.5	銅造	1926	同上	—
229	不明	半身像 (小)	暹羅	同上	4	銅造	1926	同上	—
230	不明	半身像 (小)	暹羅	同上	3	銅造	1926	同上	—
231	不明	半身像 (小)	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
232	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
233	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
234	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
235	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
236	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—

No.	寄贈・販売先	名称	地域・様式	年代	寸法 (inch)	材質	寄贈・売立年	出典	備考
237	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
238	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
239	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
240	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
241	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
242	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
243	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
244	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
245	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
246	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
247	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
248	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
249	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
250	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
251	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
252	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
253	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
254	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
255	不明	仏首	暹羅	同上	—	銅造	1926	同上	—
256	不明	仏立像 (老樹)	暹羅	11世紀	29.5	銅造	1926	同上	—
257	不明	仏立像 (老樹)	暹羅	同上	35	銅造	1926	同上	—
—	不明	仏頭部 ⁽³³⁾	カンボジア	—	—	石	1932	「世界古美術大展覧会」	
—	不明	仏頭部 (光背・右手付) ⁽³⁴⁾	カンボジア	—	—	石	1932	同上	
106	不明	アユチャ朝石仏 ⁽³⁵⁾	タイ	—	—	石	1938	「東洋古美術展覧会」	
107	不明	シャム石仏首	タイ	—	—	石	1938	同上	
108	不明	シャム石仏首	タイ	—	—	石	1938	同上	
110	不明	シャム石仏首	タイ	—	—	石	1938	同上	
112	不明	アユチャ朝石仏	タイ	—	—	石	1938	同上	

(33) 「東西古甸金石展観」No.180~188か

(34) 「東西古甸金石展観」No.176, 179か

(35) 半身像またはカンボジア竜王光背半身像か

山中商会が見た東南アジア

② 国外売立1926年、Siamese bronze sculpture (Dating from about 12th to 15th Centuries)

No.	タイトル	形状・特徴	寸法 (ins)	備考
1	Statue of Buddha	Seated in bhumisparsha mudra, right shoulder bare, robe from left shoulder under right arm, curled hair, ushnisha with cavity	30	
2	Head of Buddha	Oval face, arched brows, straight nose, short spiky hair to ushnisha with cavity, marble socle	14.5	Plate I
3	Statue of Buddha	Seated in bhumisparsha mudra, right chest bare, tight robe, flamed spire, cushioned padmasana	33	Plate II
4	Statue of Buddha	Standing, arms bent forward palms out, negroid facial type, bare chest, belted lower robe, pointed ornament	47	
5	Head of Buddha	Broad forehead, feminine soft face, oblique eyes, rounded curls, ushnisha cavity, traces of gilding	13	Plate III
6	Fragment of Buddha	Right torso to thigh, left side missing, close robe, belt, curled hair, subdued ushnisha	19.5	
7	Head of Buddha	Long feminine type, thin nose, lotus-knop ears, triple conical head with spikes, crown with scrolls	17.5	Plate III
8	Statue of Buddha	Jain-type standing, feet missing, mournful face, long fingers, belted robe, cloak attached to arms	22.5	
9	Fragment of Buddha	Standing three-quarter, right forearm missing, severe expression, plaited belt, curled hair, ushnisha hollow	14.5	
10	Statue of Buddha	Jain-type standing, right hand up, left missing, supercilious smile, belted robe with cloak, pointed hair	22	Plate III
11	Statue of Buddha	Standing, feet missing, right forearm up, left arm down, sneering expression, belted robe with cloak	16	
12	Head of Buddha	Feminine type, oblique eyes, aquiline nose, sensuous lips, curled hair, ushnisha cavity	11	
13	Head of Buddha	Strong Siamese type, aquiline nose, dreamy smile, pointed curls, conical ushnisha, traces of gilding	9.5	
14	Statue of Buddha	Standing, feet/left forearm missing, uplifted right hand, ornamented robe with inlay settings, lotus-bud ears, diadem	16.5	
15	Statue of Buddha	Standing, left foot missing, right hand up, sulky face, robe and cloak with broken sides, spire	12	
16	Statue of Bodhisattva (Maitreya?)	Standing, right hand at chest in Uttara-bodhi mudra, jewellery, armlets, anklets, coiled hair top-knot	22	
17	Statue of Bodhisattva Tara	Standing sinuous, right hand Abhaya mudra, nude torso with jewellery, diaphanous robe, elaborate head-dress	12.5	Plate IV 現在アムステルダム国立美術館蔵 ⁽³⁶⁾
18	Statue of Buddha	Standing on quadrangular base, right hand up, diadem, cloak, rich collar, spire broken	13.5	
19	Head of Buddha	Long oval face, sharp nose ridge, oblique eyes, pointed curls, flat ushnisha, spire missing	7.5	D. Wallies ⁽³⁷⁾

(36) 所蔵品 No. AK-MAK-203。出典：アムステルダム国立美術館データベース <https://www.rijksmuseum.nl/en/collection/object/Tara-of-een-godin-5c672d2c4fe57e36c2f60dd7c2ccb14c?query=yamanaka&collectionSearchContext=Art&page=1&sortingType=Popularity&tab=data>

(37) 手書きのメモ

No.	タイトル	形状・特徴	寸法 (ins)	備考
20	Head of Buddha	Sad face, diadem with side flanges, double top-knot, spire missing, green patina	5	
21	Head of Buddha	Reposeful features, curled hair, ushnisha drilled for spire, earth-stained	5.5	
22	Bust of Buddha	Fragment waist up, right shoulder bare, robe from left shoulder under right arm, traces of gilding	7	Plate V
23	Head of Buddha	Broad nose, sensuous lips, vacant features, curled hair, spire missing	6	J. Epstein ⁽³⁸⁾
24	Fragment of Buddha	Half-length, right forearm/left arm missing, aquiline nose, robe over left shoulder, spire	8	
25	Head of Buddha	Broad aquiline nose, drooping eyelids, thick lips, curled hair, low ushnisha	5	Plate V
26	Head of Buddha	Grumpy features, engraved eyes closed, crown broken	4	
27	Half-length Buddha	Hands in meditation, closed eyes, deep collar, diadem with side flanges, double top-knot	6	Plate V
28	Half-length Buddha	Hands in meditation, right shoulder bare, robe over left shoulder under right arm, curls, spire	5	
29	Head of Buddha	Expressionless, aquiline nose, curls, spire missing, traces of gilding in hair	6	
30	Half-length Buddha	Hands in meditation, right shoulder bare, robe over left shoulder, band on torso, spire	8.5	
31	Statue of Buddha	Seated adamantine pose, bare body, diadem with side flanges, spire missing	5.5	
32	Head of Buddha	Siamese-Khmer type, aquiline nose, lotus-bud ears, diadem with scrolls, double top-knot, spire	5.75	
33	Head of Buddha	Mournful expression, engraved brows/eyes, flamed spire	7	Rutherfordstone ⁽³⁹⁾
34	Head of Buddha	Heavy-eyed, aquiline nose, double fillet, flamed spire	6	
35	Bust of Buddha	Khmer type, diadem with side flanges, double top-knot, spire missing	3.75	Plate V
36	Head of Buddha	Reposeful features, one pearl inlay eye remaining, diadem with jewels, ringed spire	3.25	
37	Bust of Buddha	Sad expression, right shoulder bare, curls, flamed spire, much gilding remains	4	Plate V, R. Firy ⁽⁴⁰⁾
38	Head of Buddha	Round full face, curls, flamed spire	4.5	
39	Head of Buddha	Heavy-eyed, broad nose, curls with fillet, spire with half-circles	5.5	
40	Head of Buddha	Broad flat nose, thick lips, curls with fillet, flamed spire	5.25	
41	Head of Buddha	Mournful, aquiline nose, diadem with jewels, double top-knot, spire missing	4.4	J. Maltwood ⁽⁴¹⁾
42	Statue of Buddha	Seated in meditation, collar and armlets, diadem with side flanges, triple top-knot	5.5	

(38) 手書きのメモ

(39) 同上

(40) 同上

(41) 同上

山中商会が見た東南アジア

③ 海外寄贈・販売リスト

寄贈・購入先	名称	地域・様式	年代	寸法 (inch)	材質	寄贈・売立年	出典	備考
The Met	Seated Buddha	カンボジア	9-14世紀?	H.22.5	石造	寄贈1928	Met データベース、『山中定次郎翁傳』「美術品の寄贈その他」	https://www.metmuseum.org/art/collection/search/38890
Detroit Institute of Arts	Head of Siva	暹羅／クメール	12-13世紀	16.5	銅造	寄贈1928?	DIA データベース、『山中定次郎翁傳』同上	https://dia.org/collection/head-siva-36122
Royal Ontario Museum	Figure of Buddha (head)	暹羅・アユタヤ	18世紀	11.8	銅造	寄贈年不明	ROM データベース、『山中定次郎翁傳』同上	https://collections.rom.on.ca/objects/318694
The Met	Head of Bodhisattva Avalokiteshvara	タイ・ロップリー	12世紀後期	17	石造	販売1926	Met データベース	https://www.metmuseum.org/art/collection/search/38607
Harvard Art Museums	Head	カンボジア	9-12世紀	14.4	石造	販売1927	Harvard データベース	https://hvrd.art/o/209361
Freer/Sackler (Smithsonian)	Buddha sheltered by Naga	カンボジア	20世紀	24	石造	接收1942-44、売立1944	F/S データベース	https://asia.si.edu/explore-art-culture/collections/search/edanmdm:fsg_S1995.119/
Walters Art Museum	Head of the Crowned Buddha	タイ・アユタヤ	15-16世紀	13.75	銅造	購入1931	Walters データベース	https://art.thewalters.org/object/25.1/
The Museum Rietberg	Buddha head	タイ	17-18世紀	12cm	銅造	購入年不明	Museum Rietberg データベース	https://rietberg.ch/en/collections/rhi-614

④ 接收売立リスト Parke-Bernet Galleries, *Oriental Art Part I*, 1944年、山中商会ニューヨーク／シカゴ店旧蔵よりカンボジア・タイ遺物抜粋

No	タイトル	時代	地域	形状・特徴	材質	高さ (inch)	備考
12	Stone Head of Buddha	X-XTI CENTURY	CAMBODIAN (KHMER)	Small head, incised crown, cylindrical topknot	Stone	8.5	
13	Stone Head of Buddha	同上	同上	Serene face, tiered topknot, long ears	Stone	9.5	
14	Stone Head of Buddha	同上	同上	Half-smile, incised tiered topknot	Stone	11	
15	Stone Head of a Bodhisattva	同上	同上	Half-smile, high tiered topknot, ornamental diadem	Stone	13	
16	Stone Bust of a Bodhisattva	同上	同上	Meditative face, long ears, high topknot, Naga canopy	Stone	13.5	
17	Red Sandstone Buddhist Head	同上	同上	Full face, bossed headdress, long ears, arched eyebrows	Red sandstone	14	

No	タイトル	時代	地域	形状・特徴	材質	高さ (inch)	備考
18	Stone Head of Buddha	同上	同上	Closed eyes, wide half-smile, heavy earrings, four-tiered topknot	Stone	11.5	
19	Rare Bronze Head of a Deity	同上	同上	Round face, ornaments, horizontal hair tiers, fragmentary topknot	Bronze	13.5	図版あり
20	Stone Head of a Deity	同上	同上	Long ears, diadem, cylindrical headdress, serpent	Stone	15.5	図版あり
21	Stone Head of a Deity	同上	同上	Smaller, headdress variation, slight mustache	Stone	12	
22	Stone Head of a Deity	同上	同上	Mustache, pointed beard, ornate collar and crown, serpent symbol	Stone	17	
23	Stone Head	同上	同上	Heroic size, full lips, tiered topknot	Stone	16	Exhibited at the Cleveland Museum of Arts 図版あり
24	Indian Black Granite Vishnu Group	同上	同上	Four-armed Vishnu, attendants, arched plaque	Black granite	26	図版あり
25	Stone Head of Buddha	同上	同上	Braided pointed headdress, Naga canopy, fragmentary	Stone	24	図版あり
26	Stone Head of Buddha	同上	同上	Pointed topknot, Naga canopy, fragmentary	Stone	17.5	
27	Red Sandstone Statuette of Buddha	同上	同上	Cross-legged, snake canopy	Red sandstone	17	
28	Stone Buddhist Head	同上	同上	Downcast eyes, cylindrical headdress with Buddha relief	Stone	16	
29	Stone Bust of a Bodhisattva	同上	同上	Half-smile, ornaments, cylindrical topknot with Buddha	Stone	19	
30	Stone Statuette of Amida Buddha with Canopy	同上	同上	High topknot, snake canopy	Stone	22	
31	Stone Statuette of Amida Buddha with Canopy	同上	同上	Larger, repaired canopy	Stone	37	
32	Stone Statuette of Amida Buddha with Canopy	同上	同上	Fragmentary canopy	Stone	29.5	
33	North Indian Polychromed Statuette of Vishnu	同上	同上	Four-armed goddess, jeweled, high crown	Stone (polychrome)	19 (statue) / 43.5 (pedestal)	

山中商会が見た東南アジア

No	タイトル	時代	地域	形状・特徴	材質	高さ (inch)	備考
34	Stone Bust of Buddha	同上	同上	Benign smile, braided hair, quatrefoil topknot	Stone	20.5	
35	South Indian Stone Figure of Parvati	同上	同上	Bust, downcast eyes, narrow diadem, large rosettes	Stone	16	
36	Stone Fragment of a Buddhistic Stele	同上	同上	Smiling lips, long ears, cylindrical topknot, fragmentary plaque	Stone	11	
37	Stone Bust of a Bodhisattva	同上	同上	Necklaces, ear ornaments, Buddha on topknot	Stone	14	
38	Stone Buddhistic Head with Fragment of Stele	同上	同上	Small head, bossed topknot, fragmentary plaque	Stone	10	
39	Bronze Head of a High Priest	XIII-XV CENTURY	SIAMESE	Downcast eyes, aquiline nose, long ears	Bronze	10	
40	Bronze Head of the Crowned Buddha	同上	Ayutthaya	Crown with rosettes, ornaments	Bronze	10.5	
41	Bronze Head of Buddha	同上	SIAMESE	Downcast eyes, pointed ears, bossed curls	Bronze	11.5	
42	Bronze Buddhistic Head	同上	Lopburi	Closed eyes, fragmentary headdress, green patina	Bronze	10.5	
43	Bronze Buddhistic Head	同上	同上	Similar to No.42, cheek fragmentary	Bronze	12.5	
44	Bronze Head of a Deity	同上	同上	Long ears, bossed curls, green patina	Bronze	12.5	
45	Bronze Head of a Deity	同上	同上	Narrower face, cheek hole	Bronze	14	
46	Stone Head of Buddha	同上	SIAMESE	Long ears, bossed headdress, repaired	Stone	16.5	
47	Bronze Head of Buddha	同上	Ayutthaya	Dignified, bossed hair, green patina	Bronze	15.5	図版あり
48	Bronze Head of Buddha	同上	同上	Similar to No.47, ear lobe missing	Bronze	16	図版あり
49	Bronze Statuette of the Standing Buddha	同上	SIAMESE	Standing, bossed headdress, fragmentary	Bronze	19	
50	Bronze Statuette of the Standing Buddha	同上	同上	Slender standing, long ears, bossed curls, fragmentary	Bronze	29	
51	Bronze Figure of Buddha	同上	Lopburi	Dignified, bossed topknot, bust with fragmentary arms	Bronze	19	